書　　評

アンスレイ・J・コール，　メルヴィン・ゼルニック
『アメリカ合衆国における出生率および人口の新推計』

Ansley J. Coale and Melvin Zelnik, *New Estimates of Fertility and Population in the United States-A Study of Annual White Births from 1855 to 1960 and of Completeness of Enumeration in the Censuses from 1880 to 1960-*, Princeton University Press, 1963, xvi + 186 pp.

アメリカ合衆国の人口史に関心をよせる者にとって最も大きな研究上の障害は，20世紀初期までの人口統計が不備なことである。出生登録地域 Birth Registration Area がすべての州をカバーするにいたったのは1933年以降のことであって，それ以前の期間については信頼できる出生統計を見出すことはできない。また1880年以来10年ごとに実施されているセンサスについては調査漏れや不正確な年齢申告などの欠陥があってこれをそのまま利用することはできない。

本書は著者達がこのように欠点の多い人口統計を補足修正すべく推計をおこなった結果をまとめたもので，その意義は高く評価されなければならない。しかも本書の価値はたんに推計結果として提示された統計数値だけにあるのではなく，推計をできるかぎり正確にするために著者達によって基礎資料に加えられた検討および創案された推計方法にも大きな貢献を見出すことができる。

推計方法の詳細な，専門的な解説は本書の第Ⅲ部（第6～9章）と3つの追加 Appendices にのべられているが，いま第2章「方法の一般的敍述」にしたがって方法の概要を摘記すればつぎのとおりである。

まず，推計の礎石となる基礎資料としては1880年から1950年にいたる各回センサスに記録されたアメリカ生れ白人 native white population の年齢各歳別人口をとる。つぎに，この年齢別人口にみられる特定年齢への集積 age heaping を補正する。この補正は，1880年から1950年にかけて特定年齢を虚偽に選択する割合がほぼ直線的に低下していたという著者達によって見出されたトレンドを基礎にしておこなわれた。

このようにして補正された年齢別人口の x 歳人口は x 年前に生まれた出生コーホートの生存者であることから，この間の生残率を別途推計することができれば，これを基礎にして x 年前の出生数を計算することができるはずである。著者達はこの考え方にしたがって推計を進めたが，ここで必要な生残率は次のようにしてもとめられた。

(1) 西ヨーロッパの人口および西ヨーロッパに起源をもつ人口（U.S. カナダなど）については，生命表死亡率 q_x は一定のパターンをもっており，したがって $\mathring{e}_0$ と q_x の間にげんみつな対応関係がある。(2) 1900～1950年の期間について合衆国の $\mathring{e}_0$ と西ヨーロッパ6カ国平均の $\mathring{e}_0$ とはほぼ一致する。(3) 1850年合衆国の $\mathring{e}_0$ がジェイコブソンによって推計されているが，それは前述ヨーロッパ諸国の1850年の $\mathring{e}_0$ とほぼ一致する。これらの事実を確認したうえ，さらに合衆国の $\mathring{e}_0$ が1850年から1900年まで直線的に上昇したという仮定をもうけてその間の $\mathring{e}_0$ を推計し，それを軸にして $\mathring{e}_0 \to q_x$（ヨーロッパの）として求められた q_x が合衆国に妥当するものとして採用された。

推計の結果えられた粗出生率の動きは，その短期の変動（第3章）と長期のトレンド（第4章）に分けて説明が加えられているが，著者自身ものべているように，それらの動きについて社会経済的解釈をほどこすことは本書の本来意図するところではない。なおこの出生率の動向はさきにトムソン，ウェルプトンのえたものと大差はないが，コール，ゼルニックは分母人口の調査漏れを補正しているため，出生率の水準は全体として低くなっている。また第5章にはセンサス・エラーの推計結果がのべられているが，それによると誤差はかなり大きい。わが国のセンサスは精度が高いといわれているが一度同様な方法によって検討してみる必要があるとおもわれる。

（岡　崎　陽　一）